

## 第4章

# さまざまな職場で働く 発達障害のある人

### • 雇用事例 •

株式会社アドバンテストグリーン  
株式会社かんでんエルハート  
社会福祉法人 省我会 せいがの森保育園  
株式会社ヒガ・インダストリーズ  
共栄繊維株式会社  
株式会社高島屋 大阪店  
株式会社田谷 美容室TAYA あざみ野店  
東亜石油株式会社 京浜製油所 扇町工場



# 親会社にも好影響を与える「新しい風」 将来はマネジメントもやらせたい

群馬県邑楽郡明和町の田園風景の中に、大駐車場を完備した近代的ビルが建っている。一角には多様な生物が生息できるビオトープも設置され、ほのぼのとした雰囲気を出しているが、ビルの中にはコンピュータが多数配置され、最先端のテクノロジーの研究・開発が行われている。その株式会社アドバンテスト群馬R&Dセンターで、黙々と清掃業務に励んでいるアスペルガー症候群のFさんを訪ねた。

## 「案ずるより産むが易し」年配者とのコンビで居心地がいい

アドバンテストグリーンは、株式会社アドバンテストの100%出資の特例子会社として2004年9月に設立された新しい会社だ。親会社や関連会社の造園、警備、清掃等の業務を担っている。

Fさんは、株式会社アドバンテスト群馬R&Dセンターの清掃を担当。100メートル以上はありそうな長い廊下の清掃、休憩室のペットボトルやカンの回収、分別な

どが今の主な業務だ。

直属の上司で、Fさんが入社してからリーダーとして指導してきた酒井さんに話を聞いた。

「障害のある人と一緒に仕事をしたことがありませんでしたから、心配しましたが、作業にしろ、教えるにしろ、健常者と変わりません。ハキハキしていて、指導していても楽でした。わからないことは何回も聞き直してくれるし、作業中に何かあったら、小さなことまで手帳にメモをして報告してくれます」

Fさんの所属する部署は、Fさんのほかに後輩の知的障害者が2人、Fさんの両親より年配のパート社員の女性が5人という構成だ。

株式会社アドバンテストグリーン代表取締役の青木一男さんは、「Fさんが落ち着いて仕事ができるのも、職場環境がいいからだ」と自負しています。年輩の女性パート社員との組み合わせが非常にいいと感じています」と言う。



## 大学時代は政治経済の教員志望。 アスペルガー診断は24歳のとき

大学生のときのFさんは、学校の先生を目指していた。専攻は政治経済。そのために教職課程の単位も取得していた。アドバンテストグリーンに入社する前は、さまざまなアルバイトもやった。しかし、仕事が遅すぎるという理由で辞めさせられた。仕事を探すためにハローワークにも通った。

「社会人になるということは健康保険証と厚生年金の手帳を持つこと。それが一人前ということなんだ」とFさんの頭の中にはあった。

Fさんが、アスペルガー症候群と診断されたのは24歳のときのこと。

「当時、自分の気持ちが悪くていたので病院に通っていました。そこでアスペルガーと診断されま

### 会社概要 株式会社アドバンテストグリーン

(株式会社アドバンテスト100%出資の特例子会社)

代表取締役 青木一男

営業開始日 2004年10月1日

従業員数 52名

障害者雇用 14名

本社 埼玉県行田市富士見町1-16-1

事業内容 (株)アドバンテストの造園、警備、清掃、廃棄物の回収、分別、運搬、受付業務のほかアドバン工房の運営・管理、寮管理業務。



した。言葉の遅れ、人の話を聞いて自分なりに理解することが困難ということです。そう診断される前も、問題になったことがありました。その頃からメモをして、理解しようとしていました」

ハローワークでは「職業訓練を受けてから探したほうがいい」と、埼玉障害者職業センターを紹介された。そして2004年7月、就職した。

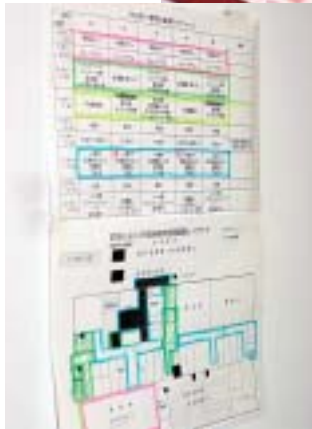
「就職できて、『何か』を見る目が変わったような気がします」と話すFさん。勤務時間は、一般社員が出社する前に始めなければいけないため、朝7時から午後3時までだが、Fさんは6時半には出社して清掃作業を始めるという。仕事に対するFさんの意気込みが伝わってくるようだ。

## 会社の期待は大きい。 資格取得にも意欲

「Fさんは、わが社にとって重要な戦力です。入社1年半が経って、いま第1ステップが終わって第2ステップに入ったところです。ポリッシャーなどの自動機器を取り扱うレベルの高い段階に入ってきています。

また、安全推進員の資格を取るために2日間の講習を受けたり、カンやペットボトルなど廃棄物関連の資格を取るなど、外に出る研修もテーマになってきます。そして第3ステップめは、後進の指導、マネジメントができるようになることです。Fさんならできると思います。今はパート社員という立場ですが、ゆくゆくは特別社員になってほしいと思っています」と青木社長の期待は大きい。

Fさんが入社してから、作業を



効率よくやるために、用具や廃棄物を入れる台車がFさんの提案で改良された。そのほかにも、3種類あるホワイトボードのイレーザー（白板ふき）に、それぞ

れマークを入れたり、電源スイッチにも印を入れたり工夫をしている。そうすることで安心して仕事ができるようになった。

「入社1年ぐらいで自己提案をしてきて、リーダーの酒井が『それはいい』と受容する。Fさんにとって、モチベーションの維持になっている」（青木社長）

自分で考えて、入社以来つけている手帳も5冊目になった。

「ずっと立って作業していますので、初めのころは午前中だけで疲れてしまいました。そのためにも休日はスポーツジムに通って、体力をつけるようにしています。

家族は『自分のペースであせらず、ゆっくりやりなさい』と言ってくれます。自分では働くにあたって『早まらずに、一歩下がって考える』ということを実践しています」（Fさん）

「ご家族の話や聞くと『家に帰ってからの顔つきも変わった。親戚の人が来ていても、以前は自分の部屋に行っていたが、今は話をするようになったし、兄と仕事の話ができるようになった』と喜んで」（青木社長）

最後に青木社長は、Fさんを雇用したことで、次のような感想を

## 親会社の評価も

代表取締役  
青木一男さん

Fさんが入社したことで「新しい風が吹いた」と思っています。誰に対しても、挨拶はきちんとできるし、礼儀正しい。親会社からも「近頃珍しい立派な青年がいる」という評価も実際に受けています。そんな彼の持ち味を持ち続けてほしいです。酒井さんに指導を任せたのも人柄、経験含めて適任だと思ったからです。

## 仕事は丁寧で、間違いはない。 はっきり教えることが大事

業務部業務1課 環境係リーダー  
酒井 剛さん



障害のある人と一緒に仕事をすることがありませんでしたから、しばらく眠れないほど心配しました。いざ一緒に仕事をしてみると、礼儀正しい、素直な青年です。よく理解してくれるし、わからないことは聞いてくる。今では障害者と意識して指導はしていません。一緒に勉強している感じですね。

語った。

「Fさんが入社したことで、いろんな教訓を与えてくれました。単に障害者雇用というだけではなく、プラスアルファが生じてきたと感じています。我々が思っていたアスペルガーとは少し違っていたようです。心配していたのはパニックでしたが、小さいパニックが1度起こっただけです。本人も『あせらず確実に』をテーマにしているようです。また、働いてお金をもらえるという喜びも感じてきたようです」

# 半歩踏み込んで見守り、ミスも認めながら みんなが60点以上を取れる職場を目指す

大阪市を中心部。まだ昨年つくられたばかりの新しい関西電力のオフィスビル内に、かねでんエルハートのビジネスアシストセンターがある。社名の「エルハート」とは「ハートがいちばん大切」という願いからつけられた。大きな(Large:エル)心と心を合わせていこうという気持ちも込められている。そんな同社に勤務する2人の障害者を訪ねた。

## 積極的に周囲と話すことで 部署の一員になる

市川雅司さんは、親会社である関西電力において社内連絡便の集配を担当している。

オフィスには、関西電力の部署ごとに分けられた棚があり、市川さんは宛て先を見ながら手際よく社内連絡便を仕分けていく。中には部署名がはっきりしないものもあるが、そのときはパソコンを使ってどの部署に該当するのか、不明分を調査したりもする。もうすっかり手慣れた働きぶりだ。

市川さんはかねでんエルハート



に入社して、最初は園芸の部署に配属された。ここでは温室での花の栽培、営業所・発電所構内などの花だんの植え替えや管理を行っている。しかし、その後異動となり、社内連絡便の部署へ配属となった。この部署に来て1年半になる。

市川さんに、異動となったときの不安について聞いた。

「最初は、連絡便の仕分けで間違えてしまわないか不安でしたが、仕事は徐々に慣れてきました。それに部署の人たちと早く仲良くなりたいと思っていましたが、周囲の人たちが積極的に話しかけて

くれて、その点についても心配いりませんでした」

市川さんは、自分からも積極的に周囲と話をするように心がけているそうだ。

また、仕事で苦労したことについて聞くと、部署名

を覚えることが大変だと言う。

「部署が新設されたり、部署名が変わったりすることもあるので、そのときは覚えるのが大変でした。英語で書かれた宛て名など、自分で仕分けできない連絡便が届くこともあります。そのときはすぐに他のスタッフに聞くようにしています」

市川さんはこの部署に異動して、パソコンが使えるようになった。文書作成ソフトであるワードも使いこなせるようになった。

この連絡便の仕分けの仕事でいちばん大切なことは、誤配をしないことだ。そのため、この部署では配送物を何人かで複数チェックする仕組みも導入している。目標は誤配ゼロだ。

市川さんは働いて得たお金を貯めて、将来の結婚資金にしたいそう。うだ。

「働くことは、みんなが持っているいろんな夢の実現へと近づくことだと思います。だから今も働いていて楽しいですね」

## 会社概要 ..... 株式会社かねでんエルハート

代表取締役 中井志郎

設立 1993年12月9日

社員数 135名(平成17年8月現在)

本社 大阪府大阪市住之江区泉

1-1-110-58

業務内容 印刷・ノベルティ包装・メールサービス・ヘルスケア・園芸。





最後に、同じ障害を持つ人が働く際のアドバイスを聞いた。

「明るく元気に働くことです。挨拶も大きな声でするようにするといいです。それに仕事では体力もいるので健康管理も大事。周囲の人とうまくやっていくには、人の話をよく聞くことが大切だと思います」

## 周囲の人たちの協力で、安全にスムーズに働ける

かんでんエルハートでは各種印刷物のデザイン、封筒や名刺、パンフレットなどの印刷、製本を行っている。

酒井久仁由さんの仕事は印刷製本。製本機械を使用した印刷物の製本作業、仕上がり品の検品、発



送準備作業などを担当している。

この部署では、危険な製本機械が数多くあるので、赤外線センサーの取り付けなど安全対策を特に充実させている。使用する機械も安全なものを選んでおり、安全面は徹底している。

また、障害者一人での機械操作は禁止し、役職者または職務歴の長いベテラン社員とのペアで作業をするようにするなど、使用についても配慮している。

酒井さんに、この仕事に就いたときの印象を聞いた。

「周囲の人に指導していただいたので、仕事はすぐに覚えることができました。印刷機械は音が大いなので、その点は心配でしたが、仕事していくうちにだんだん慣れてきました」

酒井さんにとってこの仕事は楽しく、人間関係もいいので働きやすいそうだ。

この部署では、以前は印刷でも、白黒の名刺をつくる程度だったそうだが、今ではカラーのパンフレットまでつくれるようになった。



“障害のある人ができること”に合わせて仕事をつくるのが私たちの役割です

代表取締役  
中井志郎さん



私たちは障害のある人の採用において加点主義の考え方を取るようにしています。不得意なところは不得意でもいい、少しのミスは構わない。100点を目指さず、みんなが60点以上になれることを目指しています。一人ひとりの目線になって、その人のできることを考え、会社はその人のために仕事を取ってくる。そんな関係が大事だと思います。

また、社員みんなにお願いしていることは「半歩踏み込もう」ということです。少しはみ出してサポートしないと前進していきません。そのために、ご家族の皆さんとも連絡ノートのやりとりや面談などで、緊密に連絡を取り合っています。会社とご家族は、障害のある人にとってのクルマの両輪だと思うことが大切だと思います。

依頼主の要望を聞き、細かなやりとりが必要となる仕事だが、このような仕事が受けられるようになったのは、それだけスタッフが勉強をし、経験を重ねてきたからに他ならない。

最後に、同じ障害を持つ人が働く際のアドバイスを聞いた。

「やはり人間関係が大事なので、礼儀には気を使っています。それと仕事では、てきぱき動くことを心がけています。そのほうが気持ちよく働けますね」

働くことは「生活のため、自分の楽しみのため」という酒井さん。進化を続けている印刷の仕事での活躍が楽しみです。

# 保育園の用務の「先生」は国体選手。 将来は「保育士」になりたいと勉強を続ける

発達障害にもいろいろある。今回取材した辻本貴生さん（23歳）は読むこと書くことが苦手だ。そんな辻本さんが、園児や保護者と直接かかわりあう保育園、職員も保育士や栄養士など有資格者という職場で働いている。その横顔は、23歳の若者、そのものだった。

## 園児から「先生」と呼ばれた。 最初は照れくさかった

保育園の朝は早い。7時すぎには、お母さんに連れられた園児が登園してくる。園児や保護者から「先生、おはようございます」と声をかけられる。はじめは『先生』と呼ばれることが、ちょっと照れくさかった。今は明るい声で「おはよう」と返せる。

辻本貴生さんが、ここ『せいがの森保育園』に用務係として就職して、もう6年目になる。辻本さんの朝は、8時半の玄関の掃き掃除から始まる。玄関の次はトイレ、室内、そして園庭の掃除、草むしり、机、イスの修理や木工、夏祭りやバーベキューの準備など、仕

事は途切れない。

園庭には、ビオトープが配置され、その管理も任されている。小川にはヤゴ（トンボの幼虫）やメダカが泳ぎ、さまざまな昆虫たちが生息している。また、園庭の一角にある、辻本さんの『こうぼう（工房）』には、ノコギリなどの木工用具が並べられ、その管理も辻本さんの責任だ。

机やイスの修理をしていると、園児が集まってくる。

「先生、何してるの」

「イスを直しているんだよ」

「ボクにもやらせて」

ビオトープではヤゴやメダカの話がはずむ。

## 園児や保護者と直接の対話、 コミュニケーションが不安

辻本さんの障害は学習障害。文字の読み書きが苦手だ。小学校5年生から中学3年生まで特別クラスに在籍し、東京都立南大沢学園養護学校産業技術科に進学した。

在学中に『せいがの森保育園』には3回、実習生として職場経験

をしている。南大沢学園養護学校では、生徒の就職先の開拓でさまざまな企業を訪問している。しかし保育園で、就職含みで実習するというのは初めてのケースだった。

保育園には保育士や栄養士など資格が必要な業務と、経理や管理などの資格の要らない事務職がある。そこに障害のある人の職務はないと思いがちだが、藤森平司せいがの森保育園園長は可能性を見出したのだ。

辻本さんが園児に『紙しばい』を読んであげたときのことだ。文字を読むのが苦手な辻本さんは、ゆっくりゆっくり読んだ。その姿を見て、園長は採用を決めたという。また、「清掃や備品の修理、木工をやっている姿を園児に見せたい。園児が『何しているの』と興味を見せ、それを説明する。これも保育の一環なんです」（倉掛副園長）という。園長は保護者や職員にも、辻本さんを有資格者として採用することの効果の説明し、理解を得た。

## 教える人がいない。小学校 に用務の研修に行った

就職は決まったものの、辻本さんは不安だった。長く続けられるだろうか、園児の保護者や保育士さんとうまくコミュニケーションが取れるだろうか。もう1つの大きな不安は、用務係として採用されたものの、仕事を教えてくれる人がいなかったことだった。

最初は保育士さんや副園長に教

### 会社概要 ..... 社会福祉法人 省我会 せいがの森保育園

園長 藤森平司

認可年月日 1997年4月1日

職員数 31名

所在地 東京都八王子市別所1-73



えてもらっていたが、最初の夏休みを利用して、辻本さんの母親が勤める小学校の用務員さんをお願いをして研修を受けた。掃除のやり方、樹木の剪定、ワックスがけなどだ。次の年も、もっと仕事を覚えるために、個人的に通った。



それでも最初は、保育士さんに「もっと手際よく、もっと早く」と言われていた。保育士は忙しいせいもあって、つい辻本さんにいるいるなことを頼んでしまう。辻本さんも断れずに、優先順位もわからず引き受けてしまっていた。

保育園でも、辻本さんのようなケースを雇用するのは初めてで、試行錯誤していた。

### 小さい時はトラックの運転手、今は「保育士になりたい」

今辻本さんは、「保育士の資格取得」を目指している。読み書きが苦手な辻本さん、当然のことながら資格の本をうまく読むことができない。市役所や銀行からの書類も読むことが難しいため、実家で読んでもらったり保育士に教え

てもらったりする。そんな辻本さんが利用するのは、本来なら目の見えない人のためにつくられた読み上げソフトや、音声入力ソフト。人に読んでもらって録音し、耳で聞いて勉強している。

子供が好きで保育士になりたい辻本さんだが、小さい頃はトラックの運転手になりたかったという。2年前には普通自動車の免許も取った。「学科がきつかった」という辻本さんだが、休みの日となると、愛車スカイラインとともにどこまでも走る。この夏休みは、大阪、名古屋への長距離ツーリングにもいった。世間の23歳の若者となんら変わらない。

生まれてから両親の腕の中で生きてきた辻本さんだが、就職して給料をもらえるようになり、何とか自立できる、自分自身で生きていくという信念で、今は実家を出て、アパートで一人暮らしを楽しむ。「ホンネは自由になりたかった」と笑う辻本さんだが、自分で食事を作り、雨の日も自転車です30分かけて職場へ通う。

副園長が「ずるい」と笑うように、読み書きができないだけで、その他のことは、他の保育士さんやみんなよりうまくできる。秋に行われた岡山国体にはソフトボールの東京都代表選手として出場した。

「保育園で仕事をするので、いま生活も心も落ち着いています。時間がゆっくり流れ、自分らしく過ごせるのがうれしいです。自分の仕事に点数をつけるとしたら70点かな。この間、ノコギリで、自分の手まで切ってしまいましたから」と辻本さん。

「ぼくだってモヤモヤしたことがある。でもマイナス志向をプラス志向に変えて、3年間がんばった。君たちも、そうすれば大丈夫」と養護学校の後輩たちへアドバイスを送る。

### 彼の作業に園児が興味を持つ。これも保育の一環です

副園長  
倉掛秀人さん



辻本さんの就職に際しては、「園児や職員にとって良いこと」という園長の判断がありました。十分期待に応えてくれています。ただ、初めは就職後のストレスは心配しました。

私たちはよく言うんです。「辻本君はずるいよ。読むことと書くことは苦手だけど、他の面ではみんなの上をいってる」と。

職員だけでなく、保護者へも辻本君の障害について話し理解を得ています。

### 私たちは新しい職域を開拓していく。可能性は無限です

東京都立南大沢学園養護学校  
進路指導主任

市村たづ子さん



今、学校では学習障害の生徒について多様な分野への職域拡大を図っています。例えば、外資系企業であれば漢字の読み書きが苦手でもパソコンでの英数字入力は可能です。事務系職種は無理という固定観念からの発想の転換と企業へのメリットの提案が重要な鍵です。また、辻本さんのように障害特性と適性を職場が理解することによりさらに能力を発揮し、意欲的に働き続けることが可能です。彼らの可能性は無限です。

# ドミノ・ピザ15店舗を巡回して ジャイロ清掃に一所懸命

日本で初めて宅配ピザ業を始めたドミノ・ピザ。若い社員が、気持ちのいい声で「お待ちどう様でした」と配達してくれる。受けとるほうも、つい「ご苦労様」と言ってしまう。

町の中を走るサイコロのマークのドミノ・ピザのジャイロ（配達用の3輪オートバイ）、その清掃を担当しているTさんを訪ねた。

## ネットで見つけた求人 働いてみたいと思いました

Tさんが、ドミノ・ピザで働いてみたいと思ったのは、インターネットでホームページを見たのがきっかけだった。それまで勤めていた造園関係の会社を退職して、社会福祉法人横浜やまびこの里「仲町台センター」で、柴田珠里係長と就労相談をしていた時だ。

「Tさんと一緒に、インターネットで障害者雇用を行っている企業を検索している時に、ドミノ・ピザさんが求人していることを知ったんです」（柴田さん）

Tさんは1991年に高校を卒業し



て、神奈川県にある高等技術専門学校エクステリア科に1年通った。そこで一定の技術を身に付け、障害者としてではなく一般社員として造園会社に7年間勤務した。その後の4年間も前職の系列会社2社に勤務を続けていた。植木の剪定業務を行う会社だった。

「周りが職人さんたちですから、職人気質と言いますか、仕事に厳しく、動きが遅いと怒鳴られてしまう毎日だったようです。マイペースは許されなかったんです」（柴田さん）

## 就職して2年経ちましたが 今仕事は『いい感じ』です

Tさんは、やまびこの里の柴田さんと相談しながら、ドミノ・ピ

ザを就職先に選んだ。

「私が住んでいたところの近くにもドミノピザがありましたし、名前も有名でしたから入ってみたいと思いました。清掃は、必要な仕事ですから」とTさんは言う。

面接を受けた時に、「『ホームページを見ました』と言ったら、本社の人が『ありがとうございます』と言ってくれました」と、今でもその感激を思い出す。

仕事の内容は、ピザ配達用のオートバイの清掃と店内外の清掃だ。自宅から近い15店舗がTさんの職場になる。各店舗へ月1～2回ずつ出勤。勤務時間は10時から17時までで、毎週土日は休みとなる。Tさんを採用したことで、ドミノ・ピザでは設備面での変更やシステムの変更は行っていない。

Tさんは、就職して3カ月で6～7キロやせた。ジャイロの清掃は屋外の作業だ。真夏だったせいもあった。「役に立とうと思って一所懸命になりすぎたかな」とTさんは苦笑いする。

ドミノ・ピザの各店舗には社員が1～2名、その他はアルバイト社員たちだ。社員も店を移動して変わり、アルバイト社員も入れ替わる。行く先々で新しい人たちと会うことになる。

「気も使いますが、平常心で勤務しています」（Tさん）

「かえって良かったと思います。彼は気を使いすぎるから、それだけ替わったら気も使っていられないし、職場も従業員も毎日替わって、仕事に全力投球できますから」

## 会社概要 ..... 株式会社ヒガ・インダストリーズ

代表取締役社長

ヒガア - ネット マツオ

設立 1964年3月

従業員数 正社員370名 アルバイト  
約3500名

事業内容 全世界（50カ国以上）で  
店舗展開（7000店舗以上）。ドミ  
ノ・ピザの日本法人。





(柴田さん)

Tさんは、上司である人事教育グループ・石塚さんの指示で、各店舗での業務報告書を、パソコンのワードとエクセルを使って毎週末に作成する。毎月1回開催される本社で



の報告会で発表するためだ。前月の反省と翌月の目標を立て、文章も組み立てる。いまでは毎月3～4枚もの大作になる。

「就職して2年経ちましたが、仕事は今『いい感じ』です。バイクや機械をいじること、きれいにするのが好きなんです。そこでキズなどに気が付きます。お客様のところへピザを届けますので、きれいなバイクで届けてほしいと思っています」(Tさん)

### 「仕事中に話はやめよう。しっかり自分の仕事をやろう」

「今後は、健常者と同じような業務にチャレンジしてみたいと思います。メニュー表のポスティングもやりたい。店長からも言われて、お花見をしているお客様にパンフレットを配ることもやりました」と清掃業務以外の業務にも意欲をみせるTさんだが、上司である石塚さんは次のように言う。

「店によって、Tさんが来る日が決まっていますので、店長がTさんにやらせてもらうことを計画することはあります。店長によってその内容は違ってきます。ピザを入れるボックスの組み立てなどは臨機応変に対応できています。しかし、できること、できないことを判断して、やってほしいこと、やらせてもらうのは困ることを決めています」(石塚さん)

ドミノ・ピザには、20数種類の商品があり、高度なオペレーションを展開している。

「彼の仕事の幅を広げたいという意欲、モチベーションを保つためには、『これだったら大丈夫だろう』と事前に準備して、私が判断してやらせてもらっています。お客様への商品の受け渡しや、現金販売だけでなくクーポン券の種類など覚えることが多いですし、複雑です。何度も練習して、できると判断し、店長から頼まれればやるということです」(石塚さん)

Tさんはとても話好きだ。そして断れない性格でもある。明るい笑顔で、話を聞いてくれる人には、ついつい度を越えてしまうこともある。石塚さんからは「仕事中に話はやめよう。しっかり自分の仕事をやろう」と言われている。

「Tさんは、楽しく仕事をやっているようです。月に一度のミーティングで報告することも楽しい。パソコンで業務報告書を作ることも。新しいことを覚えるのも好きなようです。業務報告書、つまり文章を書くということで、自分の中で自分の行動が整理できているんだと思います」(石塚さん)

今日も、おいしいドミノ・ピザを届けようために、ジャイロの清掃に励むTさんが、「隔離されない、障害者も健常者も一緒に仕事がしたい」と言ったのが印象的だった。

### 自分で考えて自分で仕事をする、一人で解決できる仕事です

経営管理本部 人事教育グループ  
石塚央兄さん



Tさんが弊社に就職して2年以上経ちますが、目立ったトラブルはありません。非常に真面目で明るく、接しやすい性格です。15の支店を回っていることは、Tさんのためには良いことだと思っています。ジャイロ清掃や店内の清掃は、自分で考えて自分で仕事をする、一人で解決できる仕事です。もちろん15人の店長から指示を受けることとなりますが、Tさんの仕事は店の負担にはなりません。

### 発達障害もさまざま。密接な関係がいいとは限らない

社会福祉法人 横浜やまびこの里  
仲町台センター  
就労支援課 就労支援係 係長  
柴田珠里さん



Tさんの性格や特徴を理解して、適切に対処していただいていると思います。発達障害の場合、職場の人が密接に関わってフレンドリーに接したほうがいいと思いますが、人によってさまざまです。Tさんの場合、それが仕事に妨げになったり、苦手だったりします。そこでドミノ・ピザでは、「職場内ではあまり話をしないようにしよう」という対処の仕方、Tさんのいい面が出ていると思います。

# 社内コミュニケーションもスムーズ。 家族的な雰囲気の中で仕事ができる

東京・池袋から埼京線快速で35分、指扇に共栄繊維はある。工場内には、全国から集められた中古衣料がうず高く積み、選別、裁断、圧縮が行われている。大型トラックが圧縮された中古衣料を満載にして工場をあとにする。共栄繊維は、月間1200トンもの中古衣料を、アジア・アフリカ諸国に輸出する世界トップクラスの企業なのだ。環境を第一に考える同社に勤める2人の障害者を訪ねた。

## あくまで真面目に 仕事に取り組む

工場の中2階にOさんの作業場はある。Oさんは、Gパンや綿パンを5枚ずつ2つ折りにしてカゴに収納、100キロになったらエレベーターで1階に下ろす作業を担当している。今ではスーツを上下そろえてきれいにたたみ、仕分けをし、大型台車に規則正しく積み上げていく作業も始めた。虫食いや擦り切れをチェックするのも忘れない。

「世界各国に輸出されますから、



穴が開いているのを見逃したり、不良品を出したら会社の信用問題なんです。気をつけています」と、Oさんは真剣に作業に取り組んでいる。

Oさんは、大学を卒業後、手動写植機のオペレーターとして大手印刷会社に勤務した。

「雑誌や書籍の締め切りに追われ、品質管理の厳しい職場でした。周りの人とうまくコミュニケーションがとれなくて、きつかった」というOさんだが、6年後退職することになる。その頃はまだ、周りも本人も自閉症だという認識はなかった。

自分で障害を自覚してからは、さまざまな病院に通った。就職で

きない日が続いた。療育手帳を取得したのはわずか2年前のこと。

埼玉障害者職業センターで約半年間の職業訓練を受け、共栄繊維にトライアル雇用された。2週間後、会社から正式採用を告げられた時、

職場のみんなが驚くほど大きな声で「やったー」と叫んでいた。努力してもなかなか就職できない、将来への不安などが払拭された瞬間だったのだろう。

「ファッションに興味がありましたから、衣料業界に就職できたことは本当にうれしかったです。でも一方で、長くやっていけるだろうかとの不安もありました。今は、仕事はとても面白いですし、自信がついてきました。作業上、わからないことは先輩に聞いています」と、丁寧に話してくれる。

「ジョブコーチの人や会社の人に支えられて、続けていけそうです」(Oさん)

勤務時間は朝8時半から昼休みをはさんで午後5時半まで。自宅からJRの電車で約1時間、指扇の駅からは、会社の送迎バスを利用している。

「休日は、漫画やイラストを描いたり、インターネットでネットサーフィンを楽しんでいます」。そんなOさんは、同じ障害を持つ人たちに「あせらず、あきらめず、希望を持って生きていこうよ」とメッセージを贈った。

## 会社概要

## 共栄繊維株式会社

代表取締役 矢崎 淳

創業 1970年3月1日

社員数 160名

障害者雇用 6名

本社工場

埼玉県さいたま市西区宝来615-1

業務内容 ウェス、工業用品(軍手、スミス、布手)の製造販売、中古衣料の輸出・販売。



## 自分の理解者をたくさん つくって、乗り越えた

Oさんと同じ時期に入社したのが、Mさん（28歳）。大学を卒業して、夢を持ってコンピュータソフトウェアの会社にプログラマーとして入社したが、2カ月で退職。そのあと福祉の仕事をやろうと、ホームヘルパーの資格を取った。勇んで就職したが、ここも1週間で退職を余儀なくされた。周囲とうまくコミュニケーションがとれないことが原因だった。

「あなたはどこの会社に行っても務まらない。就職は無理だ」と言われたことがショックで「死にたいとも思った」という。

まだ、自分に障害があるということとは知らなかった。

「でも、相手の言葉を理解するのに時間がかかりましたから。すぐに答えられないんです」とMさん。記憶力は良かったし、暗記することも得意だった。大学でも農業経済を専攻していた。



2つの就職に挫折し

て、求職のためハローワークへ通った。就職できないことで、イライラする毎日だった。ハローワークの職員から「心療内科に行ってみたら……」と声をかけられ、カウンセリングに通った。そして昨年5月、自分がアスペルガー症候群だということを知った。

共栄繊維に就職が決まる前は、授産施設で印刷の作業、裁断や製本、在庫チェックを行っていたが、支援センターからの紹介で共栄繊維に職を得ることになる。

「共栄繊維に就職して、とても良かったです。周りの人は優しいし、休み時間には気さくに話してくれる。失敗しても優しく注意し

てくれます」と、今就職できたことを心から喜んでいる。

Mさんの仕事は、メリヤス生地を色分け、仕分け、裁断してウエスの材料を作ること。Mさんの母親と同じぐらいの年齢の班長が指導している。Mさんは、作業を理解するために、手順や注意事項をノートにメモをとって覚える努力も欠かさない。「まだまだ、ベテランにはかないませんが、だいぶ作業にもなれましたし能率も上がってきました」と班長は笑いかける。Mさんの作業がやりやすいように、ウエスを取りやすい位置に変えるなどの工夫もした。

「私にとって働くということは、生活をするということです。両親はいつも『あせらないで』『じっくり社会に出ればいい』と言って

くれました。また、ジョブコーチの方が週に1回来てくれて、困ったことや悩んでいることを相談できるので、とても助かっています」とMさんは言う。

そして最後に、同じ障害を持つ人に向けて、次のようにアドバイスしてくれた。

「私もそうだったように、就職が決まらないと、どうしてもあせってしまいます。ですから、1つめのアドバイスは、私が両親から言われた『あせらないこと』。2つめは、よき相談手をたくさんつくることです。カウンセラーや支援センターなど、ホントに助かりましたから」

## 養護学校から毎年、職場実習を受け入れています

代表取締役社長  
矢崎 淳さん



弊社は以前より障害者雇用を行っていますし、毎年、養護学校から職場実習も受け入れています。ですから発達障害の2人を受け入れることに、会社としても社員の間でも違和感はありませんでした。当社は、衣料のリサイクルという環境関連事業を行っており、社会貢献活動としての障害者雇用、芸術・アートへの支援にも力を入れています。

## パート社員が母親役として 作業もスムーズに

総務部 総務・人事・経理担当  
藤沼輝行さん



入社の面接をした時、どこに障害があるの？というのが第一印象です。Oさんは、気持ちいいくらい大きな声で挨拶できますし、Mさんは休み時間にはパートの人たちと談笑しています。2人とも懸念していた社内コミュニケーションに問題はありません。40～50歳台のパート社員の方たちが母親のように、若い社員は兄弟のように接しています。入社当初は不安もあったと思いますが、ジョブコーチのおかげで、会社・本人ともに助かっています。まだ入社して日が浅いですが、近い将来の「戦力」として期待しています。

# 『働くことは当たり前のこと』お客様にサービスすることでお給料をもらえます

大阪高島屋に勤務するNさん（27歳）は、総務部人事グループで派遣社員の入店準備やパソコンによる勤怠入力、職員販売優待券の使用状況の入力などの業務に携わっている。

Nさんが高島屋に就職して4年4カ月。そこには本人だけでなく、上司や職場の仲間たちの努力があった。

## 子供の頃から「自分のことは自分でしなさい」と言われてきた

「就職が決まったとき、家族には『働くのは当たり前のことや』と言われました」とNさんは言う。

「子供の頃から、自分でできることは自分でしなさいって言われてきました。周囲の人が手伝ってくれるわけではありません。世間は厳しいですから自分がしっかりしなければならぬんです」（Nさん）

Nさんは、子供の頃から「自分は、他のみんなとはちょっと違うな」と感じていた。友達が自分をわかってくれないと思うことも多

かった。それでも短大に進学して、バリバリ働くことを夢見ていた。1人で就職活動もやった。でもなかなかうまくいかなかった。

就職のためには、「療育手帳を持っていたほうが有利」という情報を得て、大阪医大で診察を受けた。そこで初めて発達障害（学習障害）だと認定され自分の障害を知った。

その後、大阪市職業リハビリテーションセンターに入所して、ビジネス訓練を受けることにした。早く働きたかった。そのとき、短大を卒業して1年半が経っていた。

「いつも他の人から、常識やマナーがないのとちゃうの？と言われていました」とNさん。

## 最初のとまどいも、お互いの理解で解決した

「就職できたことは、運が良かっただけです」（Nさん）



高島屋大阪店に入社して人事グループに配属された。勤務時間は9時40分から18時10分まで。地下鉄で30分の通勤。ラッシュが終わった時間帯なので苦ではない。身分は1年契約の契約社員だ。

Nさんが行う業務は、派遣社員の入店準備や勤怠入力、職員販売優待券使用状況の入力作業などパソコンを使用するのことが多い。Nさんのために作業内容を変えてはいない。

「パソコン入力は、リハビリセンターでも少し覚えましたが、就職してから、専用プログラムに合わせてまた初めから覚え直しました。まだ、基本的なことだけですから慣れましたが、そろそろ難しいところに入りかけてきているかも……」とNさんは言う。

Nさんが配属される前には、同

### 会社概要

代表取締役社長 鈴木弘治  
 創業 1831年1月10日  
 社員数 11,011名（うち大阪店2,265名）  
 障害者雇用 全体202名（うち大阪店39名）  
 大阪店  
 大阪府大阪市中央区難波5-1-5  
 業務内容 百貨店

### 株式会社高島屋 大阪店



じ職場に知的障害のある人が配属されていたこともあって、職場に違和感はなかった。

「職場の先輩たちは、私ができもしないのになんでも1人でやろうとしたり、アドバイスしても聞かなかったり、評判が悪かったのではないですか」(Nさん)

入社当初は本人だけでなく上司・同僚にも戸惑いが大きかった。

## まずは「言葉遣い」から。意識の変革をなさいと指導

直接の上司である人事チームの藤川課長は、Nさんを職業人として育てるために厳しく指導した。

『言葉遣い』は、特に厳しく指導しました。それからビジネスマナー、電話応対など、その都度その都度注意しました。また、彼女は自分の考えを、すべてストレートにぶつけてきますし、ストレートに答えを求めてきます。婉曲にとか『例え話』というニュアンスがわかりません。同僚の言うジョークも本気にしたり……」

時間が経つにつれて、藤川課長の面談、話し合いの効果が上がってきた。同僚もだんだん彼女の性格を理解してきた。

「今でも問題が起こらないわけではありません。でも、理解しあおうとする気持ちは、みんなが持ってくれている。だから、彼女自身もずっと仕事を続けてこれたんだと思います。いまでも面談は続けています」(藤川課長)

こんなこともあった。Nさんの上司が2人で仕事の相談をしていると、Nさんは自分のことを言われているような気がしていた。「解雇される」とか「自分の悪口を言われている」と自意識過剰になっていた。それは小さい頃からの失敗経験が、Nさんの考え方を

ネガティブにしていたのかもしれない。

「まずそこから。悪いほうに考えることから直しなさいと教育していきました」(藤川課長)

## 同僚とカラオケスキーを楽しむ。課長を信頼するNさん

いまNさんは、藤川課長に絶大な信頼をおいているようだ。

「先輩と話すより、やっぱり直接の上司である藤川課長と話すことが多いです。仕事上のことでも個人的な相談でも」と話すNさん。

このインタビューでの答えも、課長にいつも言われていることを反復するかのように答えてしまう。

「私にとって働くということは、自分の生活費を稼ぐためでもありますが、お客様にサービスすることによってお給料をもらえるというのを肝に銘じています」

「自分が障害者だからといって、自己中心になってはいけない。働くうえでは、自分のことだけではなく、他人の気持ちを理解して、考えて行動することも大事。仕事はチームワークでやるものだから」

休みの日は、家のことをしたり、あまり出かけないというNさんが、自分のこと、友達のこと、障害のことをこう語った。

「世間は厳しいですから、私たちのような障害のある人は、受け入れられなかったり、冷たかったりというのが当たり前だと思うんです。私の場合、人とはうまくいかないケースが多いので、友達はいません。誘われても、できないと思ったことには参加しないし、迷惑をかけると思ったら断ります。他の人たちと同じにしていたら、あとでゴチャゴチャになるのもまずいので控えています」

## 今は周囲の理解も得られ、受け入れられています

総務部 人事グループ 人事担当次長  
引原清晴さん

総務部 人事グループ 人事チーム  
チームマネージャー 課長  
藤川美香さん



集中力は高いですし、指摘をすれば修正ができるので、事務の仕事なら十分にこなせるだろうと思いました。入職した当初は、敬語が使えない、周囲と摩擦を起こす、身だしなみが整えられない、すぐに落ち込む、上司が他の人と話しているだけで「解雇されるのでは」と思い込むなど、私どもにも大きな戸惑いがありました。

敬語の使い方、電話のとり方・取り次ぎ方など、問題が起こるたびに、その都度何度もわかりやすく説明、注意していきました。

今では周囲の理解も得られ、受け入れられています。

## 職場の理解で採用に

大阪市職業リハビリテーションセンター  
指導員  
井上直子さん



Nさんは、私どものセンターで平成12年10月から6カ月間、ビジネス訓練を受けました。言葉遣いやビジネスマナーの基礎的なものはひととおり訓練します。訓練後、高島屋様で10日間の実習を受け、採用されました。職場の上司や同僚の皆さんの理解に感謝しています。

# ジョブコーチと連携しながら 働きやすさのヒントを見つけていく

株式会社田谷は全国に157店舗を展開する美容室チェーンだ。その1店舗である、横浜市青葉区にあるあざみ野店で、今回の主役である原田未来さんは働いている。駅前通りに面したこの店舗では、原田さんを含めて16名の従業員が勤務し、毎日多くのお客さんと接している。

## ジョブコーチが3カ月間 職場で支援

原田未来さんは、専修高等学校を卒業後、社会福祉法人横浜やま



びこの里に10年間在籍していた。原田さんも両親も、早く仕事をもち、自立したいとの希望があり、この施設でいくつもの仕事を体験する。施設の受注仕事である、割りばしの封入、自動車部品の検品、組み立て、また、職場実習として塗装工場でマスキングや部品の仕分け作業も経験した。

その後、社会人への第一歩として、アルバイトで歯科助手の仕事をしたが長く続かなかった。1つのことにこだわると周囲まで巻き込んで、仕事を止めてしまうことなどが問題となった。

それでも、原田さんの仕事に就

きたいという気持ちに変わりはなく、仕事探しは続く。そして、やまびこの里のジョブコーチの松尾江奈さんが、仕事を覚えるまで職場に付き添って支援することを前提に



職を探すことになる。

「そんなとき障害者職業センターから、美容室TAYAあざみ野店の仕事の話がありました。あざみ野店では以前障害のある人を雇用した経験もあり、また従業員に若い人が多く、障害のある人が入ることに抵抗が少ないのではないかと考えました。それに美容院にはきちんとした上下関係があり、新しく入った人には若手の人が面倒をみるという文化もあります。それでトライすることになったのです」(松尾さん)

原田さんも人がきれいになる美容院は好きな場所であり、本人の意向も確認され、初めて社員としての就職が決定する。

ここでの仕事は美容道具の洗浄、店内清掃が中心。作業場(消毒室内)の清掃や整理、整頓、パーマロッド、ブラシ・刷毛類、パレットなど20種類以上の美容道具の洗浄を担当する。

最初は松尾さんや店のスタッフが仕事のお手本を見せ、それを見

## 会社概要

## 株式会社田谷

代表取締役 社長 田谷和正  
創業 1975年9月30日  
従業員数 2004名(2005年3月31日現在)  
本社 東京都渋谷区神宮前2-18-19  
(美容室TAYA あざみ野店:横浜市青葉区あざみ野2-12-3)  
業務内容 美容室経営(全国157店舗)



て原田さんが覚えていった。3週間ほどで洗いの仕事はマスターできたが、急ぎの仕事への対応では苦労があった。スタッフが急いでいるものを自分で判断して、優先順位をつけて仕事をこなすことが難しかったのだ。

それでも最初の3カ月は松尾さんが1日中付き添って仕事の段取りと一緒に覚えていき、入社から1年経つころには一人で何でもこなせるようになる。今では勤務年数も2年6カ月となり、すっかり美容室の一員だ。

「この仕事は大変なところもあるけど楽しいです。人をきれいにする場所で働くことはやはり楽しい。手首が痛くなったこともあります。仕事だと思ってやり通しました。」(原田さん)

最初はスタッフの顔と名前を覚えることも大変だったが、松尾さんと顔写真の名札を隠して当てる練習をしながら覚えたそうだ。

## 「ありがとう」の言葉で 職場の一員であることを実感

もちろん、原田さんが一人前になるまでには、店のスタッフの協力も大きかった。店の責任者である主任の佐藤圭哉さんは、最初、

障害のある人だからと気を使って接していたときは、うまくコミュニケーションできなかつたと言う。でも、ごく普通の人だと考えながら接したらスムーズになったそうだ。しかし、このような姿勢に気付けたのは、若いスタッフのおかげかもしれない。

「原田さんは虫が好きなのですが、以前お店にまで虫を持ってきたことがあって、そのとき若いスタッフが『いけないですよ』と、きちんと怒ってくれたのを見て、いい関係ができているなと思いました。特に20歳前後の若いスタッフが、障害のある原田さんにやさしいことに気付いたのです。普段も休憩時に仲良く話をしたりしていて、こんなメンバーがいることで助かっているところがあるかもしれません。」(佐藤さん)

また、スタッフが原田さんに洗いを渡し、洗浄が終わると「ありがとう」と声をかけることが、原田さんにとって新鮮だったようだ。佐藤さんは語る。一般の職場では普通のことかもしれないが、原田さんにとっては念願だった仕事に就き、職場の一員になれたことが実感できた場面だったのだろう。

原田さんが一人前になった現在も、ジョブコーチの松尾さんのフォローは続いている。時間がある



## 相談役、ストッパー役である ジョブコーチの存在が大きい

主任  
佐藤圭哉さん



TAYAでは1店舗で一名以上の障害のある人を雇用することを目標にしています。社会貢献ができる会社であること、美しさを追求する仕事は、関連していると思うからです。ただ、実際の雇用場面では戸惑うこともあるのですが、今回のケースもジョブコーチの存在が大きかったと思います。何か問題があったときでも、ジョブコーチが相談役、ストッパー役になってサポートしてくれました。

また他にも、仕事面では細かな配慮が必要だと感じます。仕事時間が余らないよう、仕事の種類をつくっておく、特に来店が少ない暇などでもできる仕事を用意するなど、障害者のある人の視点に立って配慮することが重要です。

ときにはお店に顔を出し、佐藤主任から状況を確認。月1回はお店の終礼に参加して、原田さんの状況や関わり方について職場全体に伝え、随時調整を行っている。

原田さんの将来像について佐藤さんはこう語る。

「今はお店の裏方としての仕事を中心ですが、将来はお客さんがいるフロアに出られるような仕事をお願いしていきたいですね」

佐藤さんは、原田さんの『よさ』について、認めている点がもう一点ある。従業員の中で挨拶する声が一番大きくて、はきはきしているところだ。その声はお客さんのフロアにも聞こえていて、いい印象を与えているという。原田さんの仕事への姿勢は、ここにも表れている。



## 就職1日目から仕事をこなした 能力の高さを会社も評価

東亜石油株式会社は、川崎駅から車で約10分の京浜臨海の工業地区にある。同社は、昭和シェル石油より原油・原料油を受け入れ、各種の石油製品に加工する会社だ。その東亜石油の技術課に、パソコンに向かって黙々と文書の電子化作業に取り組むIさんがいる。

まだ、入社して3カ月だが、約20人が勤務する職場に、すっかりなじみ、なくてはならない存在になっているようだ。

### コンピュータ好きのIさんに ぴったりの「文書の電子化」

Iさん(29歳)は、東亜石油株式会社の技術課に勤務している。毎日バス2本を乗り継ぎ、40分かけて通勤、勤務時間は8時半から17時まで、遅刻も欠勤もない。

Iさんは、同社に長年にわたって蓄積されてきた文書の「電子化」作業に取り組んでいる。パソコンに向かって、書類をスキャナーに通し、PDFを作成、名前を付けて保存していく。



「大正13年に創業された会社ですから、膨大な資料・書類があります。現在も増え続けていますので仕事がなくなることはありません。文書を電子化することで、時間をかけて倉庫に書類を探しに行かなくても、コンピュータネットワークを介して閲覧できるようになります。とても重要な仕事です」と語るのは、Iさんを直接指導している東亜テックスの真野廣一さん。

「I君は、出勤すると『おはようございます』と、誰にでも明る

く挨拶しますし、仕事ぶりもみんなの手本のようなようです。1回教えたことは決して忘れません。集中して仕事をしますので、私たち以上の仕事をこなしてくれます。私は、細かいところまで指導します。『給料をもらっているプロなんだから全部覚えろ』と。それが、彼が社会で生きていくためですから」と真野さんは言う。

Iさんの採用を決めたとき、東亜石油では、清掃やメール配付などの仕事を検討していた。しかし、神奈川障害者職業センターのカウンセラー柳田恭子さんから、Iさんの特性(パソコンスキルや定型的な仕事が得意、変化への対応が苦手など)を聞き、また本人との面接を経て、文書の電子化という仕事をやってもらうことに決めた。

とはいっても、人事担当の久保村さんに不安はあった。

「真野さんには、仕事のマニュアルを作ってもらい、配属される

### 会社概要

### 東亜石油株式会社

代表取締役社長 吉住 理  
 設立 1924年(大正13年)2月6日  
 従業員数 540名(2005年4月1日現在)  
 本社  
 神奈川県川崎市川崎区水江町3-1  
 京浜製油所 扇町工場  
 神奈川県川崎市扇町18-1  
 業務内容  
 石油精製業、電力卸供給事業







## 3つの仕事を同時進行。仕事の期限を早めに設定

発達障害のうち注意欠陥多動性障害（ADHD）については、最近になってマスコミでもよく取り上げられるようになってきましたが、以前は、特別な支援ニーズのある障害者として社会的に認知されていませんでした。

このことは、知的障害のないアスペルガー症候群や学習障害の場合でも同様ですが、特に社会人として職業生活を送っているADHDの人のほとんどが、さまざまな困難や不安を抱えながらも、障害のことを職場に話さずに就業しています。

そのため、ADHDについては、雇用企業への取材による事例紹介ではなく、当事者へのインタビューに代えることとしました。

Hさんは34歳。高校卒業後、就職してもう16年になる。しかし自身がADHDと診断されて1年にも満たない。

### 長男がADHDだった。自分にもあてはまる症状

長男が小学校1年生のとき、Hさんは学校に呼ばれた。ADHDの疑いだった。それまで長男の生活行動には、不思議なものを感じてはいた。しかし母親として「子供の育て方を間違ったのかしら」と、自分の過ちだと思い込もうとしていた。長男を連れて、「いっそ死のう」と山の中をさまよったこともあったという。

Hさんは、長男がADHDと診断されて、その障害のことをさまざま調べた。そして「もしかしたら私もそうなのかもしれない」と思い至った。

Hさんは、小学校の時から突拍子もないことをする子で、自分の感情にまかせて行動をする、当時は変わった子供だったようだ。宿題もやっていけない、忘れ物は日常茶飯事だった。その頃ADHDという概念は一般的に存在していなかった。

「わざとやっているわけではなく、興味が他のところへいくと忘れてしまう」（Hさん）など、小学校の時から高校まで、「生徒からだけでなく先生からもいじめられた。友人もいなかった」

Hさんは昨年9月、診察を受けてADHDと診断された。

### 3つ4つのことが、頭の中で同時進行している

高校を卒業して医療事務の仕事、介護福祉士の仕事にも就いた。しかし長続きしない。Hさんは、勘が鋭く、人の言動や態度、顔色に敏感で、すぐに爆発してしまう傾向があった。自分の感情で動いているから、周りの状況が見えていない状態になる。

「はたから見ると、全部私が悪くなってしまう。それでメチャメチャ落ち込んで、仕事にやる気が出ず、生きていくことまで辛くなる」ほど苦しんだ。

今の職場に入社して8年以上になる。

「職場の信頼できる上司、同僚に恵まれたのだと思います。どんな仕事でもこなしますし、人にはポジティブに接するようにしています。職場の人たちとはよく飲みに行きますし、8年もいますから人脈も広い」と笑う。でもまだ、自分の障害のことは言っていない。

そんなHさんも気を付けていることがある。期限のある仕事の締め切りを1週間前に設定すること、1日でこなせる仕事でも3日の猶予をもらうことだ。子供の頃のように、他の興味や面白いことがあったときにその仕事を忘れても、リカバリーできる期間を取る自己防衛だ。だから彼女にとって、

スケジュール管理は絶対のもので、スケジュール帳は必需品、常に確認を怠らない。

「私の頭の中ではいつも3つ、4つのことを考えています。仕事の中でも、私のパソコンの画面には、文書の画面が2つ、表計算画面が1つ立ち上がって、同時進行で仕事をやってしまう」と言う。

Hさんは過集中になりがちで、責任感が強く、多くの仕事をこなすため家に帰るとクタクタになってしまう。

「正社員じゃないのだから、そこまでやらなくてもいいのに、ほどほどにしたらって夫は言いますが、それができないんです」

### 学校も企業もよく知らない。ADHDを理解してほしい

「一概にADHDといっても、多動性優位型だったり、不注意優位型だったり個人個人で違います。学校や支援機関には、人間一人ひとりを見てほしいと思います。また、私のように、勤務先に自分の障害について言っていない人も多いと思います。それは企業の理解が薄いからです。奇異な目で見られるからです。だから、企業にも障害の理解を高めてほしいです。」

もう1つは、企業に告知することで、勤務先の産業医やカウンセラーが利用できて、1週間に一度のカウンセリングを義務付けることで、落ち着いて仕事ができるようになると思います」